Kumiko Sakamoto. *Factors Influencing Child Survival in Tanzania: Comparative Analysis of Diverse Deprived Rural Villages*. Singapore: Springer Nature Singapore Pte Ltd., 2020, 195 p.

新福洋子 *

本書はタンザニアの子どもの死亡について，人口統計データによる包括的な概要とケーススタディの集約的な分析により，子どもの生存のための概念枠組みをアセスメントし，相互扶助の役割を示そうと試みたものである．

本書の第 1 章は，序論と各章のまとめである．冒頭に子どもの死亡をグローバルな視点で捉えた本研究の意義と，タンザニアにおける 5 歳児以下死亡率，地域ごとの死亡率とその格差を示している．特に経済的に困窮する地域における相互扶助について，著者の先行研究で扱ってきた女性を中心とした相互扶助の倫理が，疾患や死亡に必ずしも影響を与えていなかったという結果を示し，このことから派生した問いとして，子どもの死亡に焦点を当てた “subsistence ethics（サブシステンスの倫理）” と “actual subsistence（実際のサブシステンス）” のパラドックスを，困窮地域の社会的構造から調査することを目的とすると説明している．

第 2 章は，子どもの死因について先行研究のレビューを行なっている．最初に，ユニセフの概念枠組みを用いて各種の因子を説明している．枠組みは，直接的，根本的，基本構造的な因子に分かれた形で，直接的な因子は飢餓と疾病であるが，根本的な因子には，家庭での食糧不足，母子ケアの不足，医療サービスの不足と非健康的な環境があり，基本構造的な因子は，政治・イデオロジーの上部構造や経済構造である．この枠組みでタンザニアの先行研究を分析すると，直接的な因子は肺炎，マラリア，下痢症，貧血であった．根本的な因子には，医療施設へのアクセス不良，水と衛生環境の悪さ，食糧安全保障の不足，出産間隔の短さと授乳の不足が含まれた．出産時のケアの質の低さ，母親の教育レベルの低さも子どもの死亡の根底の因子であり，さらに，基本構造的な因子として社会経済ステータスと家族の関係性を含んでいたことを説明している．

第 3 章では，人口統計データを用いた地域間のデータ分析にて地域における特徴的な因子の探索を試みている．子どもの死亡率と地域ごとの低栄養状態や食事内容などの因子との相関分析では，都会の子どもの死亡率が高く，農村地域の子どもの死亡リスクが高いことを示している先行研究に疑問を投じている．加えて，リンディ州，ドドマ州，北ウングジャ州は，夫による妻の稼ぎに対する意思決定や監視が強いことと，子どもの死亡率との関連が示された．

第 4〜6 章は，子どもの死亡率が高い地域の村の状況と，それぞれの村の子どもの死亡に関連した課題を詳しく説明している．第 4 章は 2014 年，15 年に行なわれたドドマ州のマジェレコ村の女性の調査結果，第 5 章は

* 広島大学大学院医系科学研究科

リンディ州ムチンガII村の2014年の研究に基づいた女性の質問紙インタビュー調査結果，第6章は，2015年の調査に基づいた北ウングジャ州のチャアニ，マシンギニ村の女性の調査結果を紹介している．

第7章は，上記3つのケースに基づいた子どもの死亡と他の因子のクロス集計と相関分析を行なっている．結果として，医療施設から母親が受けた知識によって子どもの生存率が改善すること，出産中の新生児死亡が3つ全てのケースに共通しており，子どもの死亡に相関していたこと，また食糧の質とジェンダーの関係性が子どもの死亡に影響をもつことが示された．3つ全てのケースで相互扶助と子どもへの食糧の共有が子どもの生存に影響していたが，子どもの薬への金銭的な援助を受けている女性の方が乳幼児の死を経験するなど，薬代をめぐる相互扶助は子どもの生存に寄与していなかったことを示している．

第8章は，本書の主題でもある「相互扶助は子どもの生存に貢献するか」の問いに応えるため，主要な影響因子と関連課題の地域による比較分析を行なうことで，村や州ごとの特性を示している．たとえば，相互食糧援助は大陸側でより優位に影響していた．教育レベルが比較的低い村では，母子保健に関する知識が違いを生み出していた．ここで「ケア」の概念が用いられているが，家族の大きさと女性の存在として定義され，ザンジバルにおいては，よりケアのある，つまりは女性の多い大きな世帯の子どもは，生存の機会が高かった．しかしながら，これは農業遊牧の大きな拡大世帯には当てはまらなかった．

本書の独自性は，経済的に困窮した地域に焦点を当て，サブシステンス経済の強みと弱みを特定しているところにある．2002年において困窮した村の状況を，2012年の人口統計データの改善と比較することで，特に理解の難しい都市部の子どもの生存に関する課題について，サブシステンス経済による説明の可能性を示している．

私は助産学研究をタンザニアで実施してきた経験から，新生児死亡に関しては触れることがよくある．ユニセフが出版しているタンザニアの新生児死亡率のデータ［UNICEF 2021］では，都市部に住んでいるほど，経済的に豊かであるほど，また母親の教育レベルが低いほど新生児死亡率が高いと報告されている．グローバルな報告では都市部や経済的な豊かさは新生児死亡率に優位に働くという報告［Smith and Trinitapoli 2020; Yaya *et al.* 2019］があり，そうした矛盾を説明するのに地域の特性を用いている点で，本書の指摘は参考になった．医学的な研究では，相互扶助を子どもの死亡の関連因子として扱うことは珍しい．しかし直接的に死亡につながるヘルスサービスへのアクセス，水環境と衛生，食糧，教育について，アフリカの地域においては相互扶助が関連しているといわれてみれば確かに納得感がある．こうした内容も統計分析だけでは実際が読み取れないものの，ケーススタディとして地域研究が含まれていることで，その内容に厚みをもたせている．

以下分野の違いもあり的外れな点もあるかもしれないが，本書の不十分に感じた点を2

つ挙げる．本書のベースとなる第 2 章の文献レビューであるが，昨今医学系の研究であれば，文献レビューに際し，どのデータベースで，何のキーワードで論文が検索されたのか，そこからどのようにレビューされた論文が選択されたのか，さらには選ばれた論文の質評価がされたうえでレビューが行なわれるが，この章にはそれらに関する記述が見当たらない．そのため，この文献レビューが書かれた当時の文献を網羅的にカバーできているのか，一部の論文が抽出されているのかが判断できない．

また，本書の難しい点は，各章，つまりは文献レビュー，人口統計の分析，ケーススタディが独立して存在しており，それぞれに調査内容が多岐に渡るため，興味深い内容ではあるが，統合して何が言えるのかは，最後の章まで読み進めないと理解することが難しい．各章に本書が一貫して何を言っていて，それぞれの章がどのようにそれに貢献しているかの記述があると，読み進める中で全体のリサーチクエスチョンが少しずつ解明されていく面白さが出たのではないかと思う．

相互扶助と保健／保険に関する研究を挙げると，堀井ら［2017］がブルキナファソで母子保健に寄与するソーシャルキャピタルの研究を行なっている．対象地域にはマイクロファイナンスが広がっており，マイクロファイナンスを通したソーシャルキャピタルには，物質的・情報的・情緒的支援が含まれていたが，そのメンバー以外に効果が波及されないことが指摘されている．また，ガーナにおける相互扶助が「顔の見える関係」，対面的な要素を強調することは，医療保険についての浜田［2010］の記述にもみて取れる．本書でも相互扶助が村全体を含むわけではないことを指摘しており，「ケア」を，地域差を含めてさらに研究するように示唆している．「ケア」というキーワードが，この with／after コロナ時代に注目を浴びており，昨今の国際学会でも散見される重要なテーマであるため，本書をケアの視点から掘り下げてみたい．

アネマリー・モルの『ケアのロジック』［2020］と比べると，本書で扱われているケアの定義は狭い．『ケアのロジック』では，自由選択とその責任を個人が負う「選択のロジック」と対比し，「ケア」を，複数の手がひとつの結果のために（長い時間をかけて）共に働く，どうにかしようと試行錯誤するプロセスとして扱う．困窮地域において，子どもの食糧を適切な量と内容で確保し，提供することはまさしくケアである．著者は最後に，ケアの子どもの生存への影響の地域差について「なぜ」そうなっているのかを問うように勧めているが，おそらくここでいう「なぜ」はケア自体をプロセスで考えないと辿りつかないように思う．女性が多くても，家族が大きくても，ケアのプロセスが働かないと子どもの食糧を適切に確保できないからである．

もう一点，権力者に奪われるケアについても興味深い記述が複数ある．第 4 章の Unyago（少女に対して行なわれる生理に関する教育）に関して，子どもや女性の死亡率が高まる若年妊娠や間隔の短い妊娠を予防す

る内容を含んでおり，女性が女性をケアする習慣とも捉えられ，ひいては子どもの生存にも寄与しうる．しかしながら，この習慣が女性器切除（FGM）と共に行なわれていたために，政府からのFGM禁止命令と共に失われてしまった．また，第8章の出産時の伝統的産婆（TBA）のケアについても，政府が国際政策に沿って施設出産を強制的に執行していったため，それが女性にとっても看護師にとってもなぜだかわからないままに，TBAが提供しているケアが奪われてしまった実情を記している．UnyagoやTBAによるケアが国際政策に沿わない要素を含んでいるがゆえに，そこに含まれるケアのプロセスが失われるということが起きている．

一方Tadaら［2020］は，タンザニアにおいて授乳に関する正しい知識とmisconception（誤った認識）が混在していることを記述しているが，授乳というのはそれ自体が子どもの生存に直接的に影響するとして，ユニセフを中心に国際社会が推進しているため，授乳自体が禁止されることはない．授乳の行動の中で，正しい知識と誤った認識を，ケアのプロセス（授乳自体や授乳支援）を壊さないようにして切り離していく必要がある．UnyagoやTBAのケアも，その地域に肯定的に働いている要素を国際社会が認識する必要がある．

著者は巻末に政策提言をまとめているが，子どもの死亡を減らすために，女性の意思決定を後押しする点は，国際的なジェンダーの論調とも重なる．しかし著者も指摘しているとおりその地域におけるジェンダーによるパワーバランスの影響は未だ大きい．その中で「決めるのは女性が良い」とターゲティングする発想に進んでしまうと，「選択のロジック」に近づき，そこに政策や権力的なパワーが加わると，男性が担っている肯定的な役割が失われることになりかねない．関わる者全員をチームの一員とし，ケアのプロセスを壊さないようにするには，「家族を巻き込んだ教育」や「意思決定に女性も参加する」ことを推奨したい．意思決定者を誰かひとり決めるというよりも，みんなで話し合い，誤った認識を切り離しながら，最終的な子どもの生存に何が必要かに辿りつけることが重要ではないか．子どもへの食糧確保や子どもの生存という因果関係が一直線ではない現象を扱う研究は，ケアのプロセスで理解していくことで，今後のさらなる発展が期待できると考える．

引　用　文　献

浜田明範．2010．「医療費の支払いにおける相互扶助―ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75(3): 371–394.

堀井聡子，Kam Alimata, Kam Gouba, Solange Esther, Minoungou Arsène and Tapsoba Valérie．2017．「ブルキナファソ農村部でマイクロファイナンスに参加する女性のソーシャルキャピタルの特徴―混合法を用いた探索的研究」『国際保健医療学会誌』32(4): 217–231.

モル，アネマリー，2020．『ケアのロジック―選択は患者のためになるか』田口陽子・浜田明範訳，水声社．

Smith-Greenaway, E. and J. Trinitapoli. 2020. Maternal Cumulative Prevalence Measures of Child Mortality Show Heavy Burden in sub-Saharan Africa, *Proc Natl Acad Sci USA*

117(8): 4027–4033.

Tada, K., Y. Shimpuku and S. Horiuchi. 2020. Evaluation of Breastfeeding Care and Education Given to Mothers with Low-birth-weight Babies by Healthcare Workers at a Hospital in Urban Tanzania: A Qualitative Study, *International Breastfeeding Journal* 15(1): 36.

UNICEF. 2021. Tanzania—UNICEF Data.〈https://data.unicef.org/wp-content/uploads/country_profiles/United%20Republic%20of%20Tanzania/country%20profile_TZA.pdf〉(2021 年 10 月 19 日)

Yaya, S., O. A. Uthman, F. Okonofua and G. Bishwajit. 2019. Decomposing the Rural-urban Gap in the Factors of Under-five Mortality in Sub-Saharan Africa? Evidence from 35 Countries, *BMC Public Health* 19(1): 616.

古沢ゆりあ.『民族衣装を着た聖母—近現代フィリピンの美術，信仰，アイデンティティ』清水弘文堂書房，2021 年，viii＋264 p.

宮脇聡史 *

本書は，著者が 2017 年に総合研究大学院大学に提出した博士学位論文を修正加筆したものであり，近現代フィリピンにおける，民族衣装や民族のシンボルを身にまとったさまざまの聖母像をその研究対象とし，像の成り立ちや普及の背景とこれをめぐる言説，作り手の意図や受け手の思い，グローバルな価値基準の影響のもとこれを評価する内外の人々のまなざしを描き出している．そして聖像の多様な位置づけを，美術，信仰，そして国民的なアイデンティティの問題を組み合わせて論じることで解明しようとしている．

「はじめに—聖画像が“生きている”国」で著者は，聖像がフィリピンの人々に特別の強い思いを抱かせることについて自身の経験から引き，印象的な導入を作り出している．

「序章 民族衣装を着た聖母—包摂と異化の視覚表象」は聖母像の現地化をめぐる背景について概観している．まず「民族衣装」というアイデンティティ表象を用いることを「文化の客体化」とし，それが近代以降の聖像の現地化の特徴であると指摘している．またアジアの聖母像の現地化の事例を紹介し，そこでの「宣教美術」や「土着キリスト教美術」に関心を示す西洋人宣教師などの外部者の介在の重要性を挙げ，現地の動きと国際的な動向の相互関係の中で，各地で現地の衣装をまとう聖母像が創出されたとする．

「第一章 フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と図像—マゼラン上陸からピープルパワーまで」は，フィリピンにおいて聖母崇敬と聖母像が定着し現在に至る過程を描いている．また現代の信者たちによる聖画崇敬の実践と，そこでの聖母像の役割を概観している．多様な称号の聖母像が広く崇敬され，聖母像行列などの行事がもたれていること，新たな像の導入や創出が続いていることが丹念に描かれており，こうした歴史と信仰実践が民族衣装の聖母像の誕生の背景にあるとしている．

「第二章 バリンタワックの聖母—革命とフィリピン独立教会」は，フィリピンで最初の現地の衣装をまとった聖母像とされる「バ

* 大阪大学大学院言語文化研究科